

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

聖概念のイデオロギー性、歴史性：共同研究：
聖地の政治経済学—ユーラシア地域大国における比較研究（2013-2016）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 良男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005838

この研究は、聖地の現代的意義について、その多様性と共通の問題について検討することを目的とした人類学的比較研究である。前提となる聖性の定義に関しては基本的に社会学的・社会人類学的視点に立ち、比較の対象をいわゆるユーラシア地域大国、つまりインド、中国、ロシアに限定して、当該地域における聖地の現代的意義を、その歴史性を考慮しながら比較検討する。当面聖地とユーラシア地域大国をキーワードとしたイデオロギー論的な政治経済学的研究を目指しており、最終的には現代世界における宗教・神聖概念の再検討が課題である。

共同研究のメンバーは、中国研究者3名、インド研究者3名、ロシア研究者4名の計10名で構成されている。うち、杉本良男（インド）が総括責任者を兼ねる。また、ロシア研究者1名は現在ウズベキスタン滞在中である。専門は人類学、文学研究、地域研究、社会学など多岐にわたっているが、いずれのメンバーも十分な現地調査経験を持っており、「いまそこ」にある社会現象に関する歴史的、総合的研究という意味での人類学的研究に包括される。

宗教の復讐

21世紀に入って宗教の存在意義は一層複雑な様相を見せている。19世紀後半に宗教社会学が発展させてきたいわゆる世俗化論は、90年代以降のポスト・モダン状況の中で世界の現実に大きく裏切られた。それだけでなく、20世紀末に劇的な転向宣言を出したピーター・バーガーに象徴されるように、学問的にもその限界が指摘されている。

その一方、イーグルトン、ベック、デュピュイなどの西欧合理主義的前提に立つ一線の思想家が、相次いで宗教への関心を深めているのも現状である。一見すると転向とも見えるこうした宗教論は、当然21世紀に入ってからすぐ起こった



参加者でにぎわうインドのキリスト教最大の聖地ウェランガンニ聖堂。周囲は一大宗教ビジネス・センターになっている。巡礼客は髪の毛を神に奉納する（2013年、タミルナードゥ州、杉本良男撮影）。



世界遺産に登録されたロシア大ソロフキ島の船着き場と修道院。海からやってくる巡礼・観光客が初めて目にするのはこの修道院の姿である（2008年、高橋沙奈美撮影）。

「9.11」に刺激を受けたものと考えられる。そこでは、強い危機感が表明されているとともに、最終的には西欧合理主義が危機を克服すべきであると見ている点で共通している。

西欧近代世界において、宗教伝統は再定義され、それが自己意識化、実体化され、戦後のポスト・モダン状況のもとでさらに再々定義され、イデオロギーとして固定化、原理主義化されている。こうした現代的情况の中で聖地は、実体化・イデオロギー化された「伝統宗教」の金城湯池であり、また遺産化・商品化された「消費宗教」の花園である。この研究は、いわゆるユーラシア地域大国、つまりロシア、中国、インドにおける聖地の政治経済学的研究を通じて、宗教の現代的意義を問いただすとともに、西欧主導の聖俗論、宗教論を根本的に再考することが目的となる。

とりわけ、①高度情報化時代に入り、聖地のもつ物質性、身体性、実体性などのリアリティと、ヴァーチャルな宗教実践との関係が問題にされなければならない状況にあり、②地域大国が西欧近代的な政教分離主義を原則とする宗教概念・実践において、宗教そのものが否定されたり（ロシア、中国）、西欧的な国家と教会との分離ではなく政治と宗教そのものを分離しようとする厳密な政教分離主義を実践していたり（インド）する意味で、いわば「周縁的」な位置にあることが主要な論点を構成する。

ユーラシア地域大国

この研究で比較検討しようとするロシア、中国、インドは、いわゆるブリックス（BRICs）のうちの3国であり、いずれも硬軟は別として社会主義を経験した社会である。この地域概念は、北大スラブ研究センター（2014年4月よりスラブ・ユーラシア研究センター）が概念化したもので、科学研究費新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」（2008年

10月～2013年3月)において、実証的比較検討が行われた。杉本はその第6班「地域大国の文化的求心力と遠心力」(代表者望月哲男)のメンバーであった。

本共同研究の基盤には、新学術領域研究プロジェクトの一環として行われた若手研究者グループによるシンポジウムや『季刊民族学』141号(2012年 千里文化財団)での特集企画、あるいは山中弘(筑波大学)による共同研究の成果刊行(『聖地巡礼ツーリズム』2012年 弘文堂)への寄稿などの活動があり、その後2012年12月に杉本をふくめた7名の研究者が集まって試行的な研究会を開催した。そして、杉本を代表者とする国立民族学博物館共同研究プロジェクトとして認められ、2013年度中に2回の研究会を行った。

新学術領域研究の代表者田畑伸一郎(北海道大学)は、ユーラシア地域大国の特徴を「政治的自立性、後発成長性、半周縁性」に求めている。これは、西欧(欧米)社会へのオルタナティブの探求を目的とした各地域の比較研究によって、「中軸国(先進国)認識とならぶ新たな基軸としての経済・政治モデルの構築」が果たされたものと高く評価され、「第3回(2013年度)地域研究コンソーシアム研究企画賞」を受賞した。

これら3国は、20世紀末からグローバル化が加速する世界の、とくに経済的な焦点となっている反面、歴史的に西欧近代世界に対抗しつつ、周縁性、両義性を自己意識として強く認識していたこと、また強弱はあるものの、近代的制度を導入する際に社会主義の影響を受けていることなどの共通性を持ち、聖性をめぐる近代プロテスタンティズム的前提に対する有力な批判ととらえられる。

その意味でも、社会主義国における政治イデオロギーの宗教性、政治的カリスマの神聖化、宗教的ナショナリズムなどの宗教とイデオロギーとの相互浸透性などが、本研究で取り組むべき重要な課題である。本研究では、批判主義的な前提から、上に述べたような新学術領域研究的な目的を換骨奪胎しようとする試みでもある。この意味においても、本研究はすぐれて人類学的意義を持っているものと考えている。

聖地の聖性

ところで、今さらながら、聖地とはいうまでもなく、聖なる地、聖なる場所である。つまり、一義的には宗教的に重要な地、場所である。英語ではsacred place, holy ground (site)、また、大文字のThe Holy Landはパレスティナを意味する。ここから分かるように、基本的にはエルサレム、ヴァチカンなどのキリスト教聖地が典型であり、それが非キリスト教世界に拡大適用されたと考えるのが自然である。

人類学における聖地の聖性をめぐる議論は、基本的に聖俗二元論を前提に、その上でエリアーデやオットーなどの聖性

ありきの宗教学的・顕現論的視点と、デュルケーム、リーチらによる社会ありきの社会学的・構築論的視点とが相互補完的に存在している。この研究では、聖性の最終的審級を社会の側に求め、また聖地の現在性の歴史学的検討を行おうとする意味で、すぐれて社会学的・社会人類学的視点に立っている。

聖地に関する議論は多岐にわたるが、宗教社会学、宗教学などでは聖俗論の文脈でとくに「聖性」をめぐる行われ、社会人類学的な巡礼論の文脈では構造—反構造論の枠組みで展開されてきた。さらに、20世紀末からの高度消費社会化、高度情報化、グローバル化などの進展に伴い、聖地の消費、ユネスコ主導の世界文化遺産登録、観光化などをめぐる政治経済学的研究が要請されている。

本共同研究に先立つ北大スラブ研究センターの研究会、『季刊民族学』の特集、そして予備的な研究会においては、世界遺産化された聖地についてさまざまな問題点が指摘された。たとえば、空間論や都市社会学の立場からの場所構築のプロセスの検討、聖性を利用するヒトとカネの動きに注目した聖

地ビジネス論、宗教産業論、それに地域に根ざす研究者として考えるべき問題として、場所に関わる当事者の複数性とそれぞれの聖地表象、語りに耳を傾けることの重要性なども確認された。

さらに、世界遺産登録につきまとうグローバル化、観光化、政治性などが重要な検討課題であることも指摘された。予備的研究会においてたとえば、ユネスコによる世界遺産登録を前提とする「宗教」などの基本概念のイデオロギー性の問題が指摘された。また第2回研究会においても、中国



客家の守護神を参拝するベトナムの人々。参拝者は、客家、非客家系華人、ベトナム人などさまざま(2013年、ベトナム ホーチミン市、河合洋尚撮影)。

語における「聖地」概念そのものの歴史性、イデオロギー性の再検討が必要であるとの問題提起もなされている。

2013年度第2回の研究会(2014年1月)は、中国客家の「聖地」について、海外華人ネットワークによる客家の聖地の創造、および福建省寧化石壁の聖地化を取り上げて、聖地の政治性、イデオロギー性を問い直す報告が行われた。とくに、討論の中で、中国における「聖地」という概念そのものの歴史性、イデオロギー性を検討の対象とすべきであるとの、根本的な問題提起がなされた。

今後はさらに事例研究を積み重ねるとともに、各地域に共通する課題について議論を深める計画である。

すぎもと よしお

国立民族学博物館民族文化研究部教授。専門は社会人類学、南アジア研究。南アジアの宗教・文化ナショナリズムの研究に従事している。著書に『インド映画への招待状』(青弓社2002年)、『スリランカを知るための58章』(共編 明石書店2013年)、『キリスト教文明とナショナリズム—人類学的比較研究』(編著 風響社2014年)などがある。